

G-8 看護に対する主婦および学生の意識調査 (オノ報)

中村学園短大家政 松崎ナツ

九州大医療技術短大看護 ○鶴コトミ

目的 家庭看護学の教授指導と担当するものとして、家庭の主婦は看護に対して、どんな知識・技術を必要と感じているか、その内容や学習の時期、さらに看護の体験などについても調査し、教授指導上の参考にしたいと思った。

なお、家庭看護学を履習した短大学生と入学したばかりの学生との間に、知識や技術の上で、どれだけの差があるかについても調査を試みた。

方法 主婦を対象とする調査は、昭和47年10月～11月、福岡県を中心として、400名にアンケート用紙を配布し、その結果を集計した。

学生については、福岡市内の二つの短大学生について、家庭看護学を履習した学生、220名と、未履習学生222名について、調査を行った。

結果 主婦が受けた、看護教育の内容や時期は、教育の程度により異なるが、98%の主婦は、もつと勉強しておけばよかったと答えており、その内容の第一位は救急法について一般看護、疾病の予防などであった。

看護について学習していたために、適切な看護ができた例や、知識不足のために、失敗した例など、家庭看護の実態を把握することができた。

看護について学習する時期は、高等学校が望ましいと答えた者が、年令別、地域別、学歴別にみても、圧倒的に多い。短大に入学したばかりの学生と、家庭看護学を履習した学生と比較すると、救急法や一般看護などその意識について、かなり大きな差が認められ、家庭看護学履習の重要性が考えられる。